

連用修飾関係 「大きくV」について

—学習者の理解とコーパス

井本亮

◆要旨

形 容詞「大きい」と動詞（V）で構成される連用修飾関係「大きくV」の意味は動詞に応じて多様である。「大きくV」の修飾関係の7タイプについて、日本語学習者の理解度と難易度評価を調査した結果、「大きく変わる」など程度を表すタイプの理解度が有意に低いことがわかった。対照的に、大規模コーパスの調査ではこのタイプが用例数の上位を占めることがわかった。本稿はこの調査結果から、「大きくV」については変化の程度を表すタイプを選択・集中して指導することが有効であること、この現状に対して日本語学の通説の分類が有用ではないことを指摘する。本稿の連用修飾関係への視座は語彙教育に偏りがちな副詞の指導にも新たな展望を与えるものである。

◆キーワード

連用修飾、形容詞、「大きく」、コーパス、副詞の指導

◆ABSTRACT

The aim of this paper is to investigate how JSL (Japanese as a Second Language) learners comprehend the adverbial “*okiku*,” which has seven different readings depending on the meaning of the modified verb. This has been a blind spot in JSL textbooks, for which reason I examined the comprehension of sentences by 24 learners via questionnaire and also surveyed the frequency with which each reading appeared in the corpora. These investigations revealed the following: (i) the degree reading such as “*okiku kawaru*” (“change drastically”) had a significantly lower score than the other readings; (ii) the degree reading appears in the corpora most frequently. Little attention has been paid, in the teaching JSL, to adverbial adjectives. This paper therefore provides teachers with an alternative perspective on the proper treatment of adverbials.

◆KEY WORDS

adverbial modification, adverbial adjective, *okiku* (big/large as adverbial), corpus, teaching adverbs

How Do JSL Learners Comprehend Adverbial Adjective ‘*Ôkiku*’?

From the viewpoints of the multiple readings
of modification and the corpus data

RYÔ IMOTO

1 はじめに——本稿の論点と議論の構成

日本語教科書では副詞は依然として語彙教育的性格が強く、副詞的（連用修飾）成分に関する日本語学の知見が十分に提供されているとはいえない^[註1]。形容詞ク形の連用修飾構文は日本語の基本的な表現形式のひとつであるが、品詞分類の影響からか、その存在は現行の日本語教科書の学習項目や日本語教育文法の視座からはこぼれ落ちていると言わざるを得ない^[註2]。そこで、本稿では形容詞ク形「大きく」と動詞が構成する連用修飾構文（以下「大きくV」）をとりあげる。具体的には、日本語学習者が「大きくV」をどのように理解しているのか、「大きくV」がコーパスにどのように現れているのかを調査し、日本語教育の現場に対して、どのようなかたちで連用修飾の知見を提示していくことが現実的で有効な貢献になり得るかを検討する。

以下、2節では「大きくV」の修飾関係の7タイプを導入し、日本語学・日本語教科書での位置づけを確認する。3節では理解度と難易度評価に関するアンケート調査について報告し、理解度・難易度評価の点で、各タイプに有意差があることを指摘する。4節では大規模コーパスにおける「大きくV」の動詞別用例数調査を報告し、学習者の理解度が低いタイプがむしろ用例の上位を占めていることを指摘する。5節では「変化の差・範囲」を表すタイプの指導を提案し、日本語学の副詞的成分の分類を導入する意義が低いことを指摘する。第6節で今後の課題と論点を示し議論をまとめる。

2 連用修飾関係「大きくV」について

2.1 「大きくV」が表す修飾関係のタイプ

本稿で言う連用修飾関係とは構文的には修飾構造を取り、意味的には連用成分による被修飾成分への修飾限定を表す構文関係である（矢澤2000, 仁田2002, 加藤2003参照）^[註3]。修飾限定によって得られる修飾関係は成分相互の意味的整合性のあり方に応じて多様に解釈されうる（井本2009）。とりわけ、本稿が取り上

げる「大きくV」はその解釈の多様性が特徴的な事例である^[註4]^[註5]。本稿ではこれらの知見を踏まえて、次の7タイプの修飾関係を取りあげる。

(1) 「大きくV」の修飾関係^[註6]

- [タイプ1 (T1)] 状態変化のサマ：サイズ変化の結果状態での変化対象物のサイズ（例）風船が大きくふくらむ。
- [T2] 産出変化の産物のサマ：産出変化によって出現した産物のサイズ（例）字を大きく書く。
- [T3] 変化の産物のサマ：分割変化によって出現した産物（変化対象物の一部）のサイズ（例）ケーキを大きく切る。
- [T4] 事態継続中の実体のサマ：事態が継続する最中に出現した映像のサイズや音量（例）スクリーンに映画を大きく映す。
- [T5] 変化の範囲（量）：状態変化の影響を受けた対象物上の範囲（例）雨で靴が大きく濡れる。
- [T6] 変化の差（程度^[註7]）：変化の前後のサマ・数値などの差（例）髪型が大きく変わる。
- [T7] 運動・動きのサマ：事態が継続する最中のウゴキ（移動・振幅・軌道など）のサイズ（例）船が大きく揺れる。

修飾限定の対象となるサマは一見雑多に見えるが、動詞句が表す事象に含まれる概念的意味範疇〔モノ／コト／ウゴキ〕や事象のアスペクト的特徴〔動作／変化〕などの弁別素性の束によって体系的に捉えられる（矢澤2006, 井本2009参照）。T1・T2・T3・T4の修飾対象はモノのサマ、T5・T6はコトの程度、T7はウゴキのサマである。重要なことは、「大きくV」の修飾関係の多様性は、連用成分による被修飾成分に対する修飾限定という構文関係の原理に則ったもので決して特殊な現象ではないということである。むしろ、「大きくV」の解釈は連用修飾関係の本性を映し出す格好の現象であるといえる。

2.2 日本語学・日本語教育における副詞的成分の分類

「大きくV」の修飾関係7タイプに相当する日本語学での分類法は(1)のT1タイプ(状態変化結果)とT7タイプ(運動様態)を表すいわゆる「結果の副詞」と「様態の副詞」の対立にもとづく分類である(仁田2002,矢澤2000)。仁田(2002)の定義からみると、T1は「あり方の副詞的成分」のうち「結果を表す副詞的成分」、T7は同「様態を表す副詞的成分」に相当する。

- (2) a. 結果の副詞は、動きが実現した結果の局面を取り上げ、動きが実現した結果の、主体や対象の状態のありようについて言及したものである。(仁田2002: 49)
- b. 風船が大きくふくらんだ。[T1]
- (3) a. 様態の副詞は、動きの展開過程や実現の局面に存在したり伴ったりしている諸側面を取り上げ、そのありようについて言及したものである。(同: 79)
- b. 船が大きく揺れた。[T7]

仁田(2002)はあり方の副詞(結果の副詞・様態の副詞)の他にも程度量の副詞・時間関係の副詞・頻度の副詞を立て、それぞれ数多くの用例を挙げている。参照文法書である『現代日本語文法2』(日本語記述文法研究会2009)もこれを踏襲しており、副詞的成分の分類としてはこれが通説と言ってよい。

T2とT3は結果の副詞に該当すると考えられるが、しかし、仁田の分類ではT4はうまく位置づけられず(矢澤2000参照)^[註8]、T5・T6のような、事象の程度を表す事例は報告されていない。現在通説となっている副詞的成分の分類は品詞としての副詞や国語構文論における連用修飾語の解体^[註9]を経て、連用修飾を担う構文成分という視座の確立によって得られた記述的成果である。しかし、後続する研究では「結果と様態」の2分類が所与の前提となり、分類体系全体の再検討や修飾関係の決定要因など、連用修飾研究の次の展開はまだほとんど見られないのが現状である。「大きくV」のような事例を多角的に記述することは連用修飾研究の次の段階を志向するための一助につながると考えられる。

2.3 日本語教科書における位置づけ

日本語教科書・参考書ではおよそ中級序盤までに〈形容詞ク形+なる/する〉が導入される。たとえば『みんなの日本語』では19課(初級I)で〈形容詞ク形+なる〉、44課(初級II)で〈形容詞ク形+する〉が導入される。この構文は否定〈ク形+ない〉や接続形〈ク形+て〉などとともに形容詞ク形の文型のひとつとして導入されていると考えられるが、この構文の形容詞ク形は「なる/する」の情態概念を指定する必須補語で省略できず、厳密には連用修飾構文とはいえない(音を{大きく/*ø}する)^[註10]。便宜的に、これを「大きくV」の例とみなすならば、「大きくなる/する」の解釈はT1相当である。

明確に連用修飾構文を導入する教科書もある。『新日本語の中級』(第10課)と『できる日本語』(初中級・第7課)がその一例で、どちらも料理を作る場面を設定し、作り方を説明する発話として導入している。『できる日本語』では「エンジンを大きく切ってください」が示されるが、これはT3(分割変化の産物)である。このように、日本語教科書では「大きくV」のような連用修飾構文は〈形容詞ク形+なる/する〉で代用(代表)しているか、場面・機能的観点にもとづいて限定的に提示されるに留まっている。

3 アンケート調査——理解度と難易度評価

本稿では「大きくV」に関する学習者の理解度を知らするために、次のふたつの問いからなるアンケート調査を行った。本節ではその結果を報告する。

- (4) 問1: 学習者は「大きくV」の意味解釈を正確に理解しているか(理解度)
問2: 学習者は「大きくV」の意味解釈をどの程度「わかりやすい」と感じているか(難易度評価)

問1は、動詞の意味に依存する修飾関係の解釈が適切に行えているかを問う設問で、「理解度」と呼ぶ。問2は修飾関係の解釈を得るに至る「わかりやすさ(難しさ)」を自己評価で回答する設問で、「難易度評価」と呼んでおく。設

問は(1)に挙げた7タイプをもとに、動詞や名詞の語彙的影響を考慮して同タイプの文を3文ずつ、計21文用意した(表1参照)。問1については、各文の解釈として【(ア)モノのサマ(イ)動きのサマ(ウ)どちらでもない】に応じた個別の選択肢を設けた。例としてQ1とQ7の選択肢を示す。

- (5) Q1: 風船が大きくふくらむ。
 (ア) ふくらんで、大きい風船になった
 (イ) 大きい動きで風船がふくらんだ
 (ウ) (ア)と(イ)のどちらでもない
- (6) Q7: 船が大きく揺れる。
 (ア) 揺れて、大きい船になった
 (イ) 大きい動きで船が揺れた
 (ウ) (ア)と(イ)のどちらでもない

この選択肢は結果の副詞のパラフレーズ(仁田2002:51)を援用したもので、学習者が直接経験する教室活動でのテストとは主旨がやや異なるため、調査前に選択肢の意図の説明^[注11]や未習語彙の確認・補足を行った。問2については、【①とてもわかりにくい・②わかりにくい・③すこしわかりにくい・④どちらともいえない・⑤すこしわかりやすい・⑥わかりやすい・⑦とてもわかりやすい】からひとつを選択する7件法で調査した。調査対象者は福島大学在学中の留学生24名(中国13名・ベトナム9名・韓国2名、うちN1取得者9名・N2取得者7名)で、調査は本稿筆者が2014年7月に行った。

3.1 調査結果①——理解度について

アンケート調査の結果が表1である^[注12]。表内左列に修飾関係の7タイプ(T1~T7)と各タイプの設問文(Q1~Q21)を示し、各設問文の右欄には各文の理解度(正答率)および難易度評価点(最もわかりやすい=7.00)を示した。理解度と難易度評価の下欄はそれぞれの全体平均値(正答率:68.3%、難易度評価:4.7)との差の検定(1サンプルのt検定)によって得られたt値と有意確率(両側検定5%水準)である。

表1 「大きく+動詞」の修飾関係:学習者の理解度と難易度評価(n=24)

タイプ	設問文	理解度(正答率%)		難易度評価	
		全体平均値:68.3		全体平均値:4.7	
		t値	有意確率	t値	有意確率
T1	Q1.風船が大きくふくらむ。	75		4.54	
		0.775	0.446	-0.537	0.596
	Q8.写真を大きく拡大する。	83.3		4.92	
		1.973	0.061	0.694	0.495
	Q15.木が大きく育つ。	91.7		5.42	
		4.107	0	2.813	0.01
T2	Q2.文字を大きく書く。	66.7		5.08	
		-0.136	0.893	1.33	0.196
	Q9.屋根を大きく作る。	87.5		4.54	
		2.828	0.01	-0.549	0.588
	Q21.穴を大きく掘る。	79.2		4.96	
		1.319	0.2	0.972	0.341
T3	Q3.ケーキを大きく切る。	12.5		4.92	
		-8.048	0	0.736	0.469
	Q10.新聞紙を大きく破る。	29.2		3.79	
		-4.097	0	-3.295	0.003
	Q17.皿を大きく割る。	50		3.88	
		-1.726	0.098	-2.839	0.009
T4	Q4.映像を大きく映す。	87.5		5	
		2.828	0.01	1.175	0.252
	Q11.着信音が大きく鳴る。	75		4.75	
		0.775	0.446	0.22	0.828
	Q20.図を大きく表示する。	91.7		4.38	
		4.107	0	-1.106	0.28
T5	Q5.靴が大きく濡れる。	66.7		4.13	
		-0.136	0.893	-2.232	0.036
	Q12.血でシャツが大きく染まる。	58.3		4.42	
		-0.94	0.357	-0.963	0.346
	Q16.山が大きく崩れる。	25		4.92	
		-4.762	0	0.807	0.428
T6	Q6.髪型が大きく変わる。	45.8		4.71	
		-2.134	0.044	0.029	0.977
	Q13.技術が大きく進歩する。	16.7		4.5	
		-6.606	0	-0.628	0.536
	Q18.試験制度を大きく変更する。	37.5		4.5	
		-3.021	0.006	-0.806	0.429
T7	Q7.船が大きく揺れる。	83.3		5.17	
		1.793	0.061	1.845	0.078
	Q14.足を大きく動かす。	70.8		4.83	
		0.299	0.768	0.4	0.693
	Q19.手を大きく回す。	100		5.38	
		-	-	3.58	0.002

まず、理解度（正答率）について述べる。設問文21文全体平均値68.3と比較するためにt検定を行ったところ、次の6文については正答率が全体平均値よりも低い（＝理解度が低い）という有意な差が認められた。

- (7) Q3. ケーキを大きく切る。 (T3: 12.5%, t(23) = -8.048, p<.05)
- Q6. 髪型が大きく変わる。 (T6: 45.8%, t(23) = -2.134, p<.05)
- Q10. 新聞紙を大きく破る。 (T3: 29.2%, t(23) = -4.097, p<.05)
- Q13. 技術が大きく進歩する。 (T6: 16.7%, t(23) = -6.606, p<.05)
- Q16. 山が大きく崩れる。 (T5: 25%, t(23) = -4.762, p<.05)
- Q18. 試験制度を大きく変更する。 (T6: 37.5%, t(23) = -3.021, p<.05)

この6例の修飾関係のタイプはT3（分割変化の産物のサイズ：Q3・Q10）2例、T5（変化の範囲：Q16）1例、T6（変化の差：Q6・Q13・Q18）3例である。

3.2 調査結果②——難易度評価について

修飾関係の解釈のわかりやすさを尋ねた難易度評価の全体平均値は4.70であった。設問文21文について、全体平均値と比較するためにt検定を行ったところ、次の3文については平均値よりも高い（＝わかりにくいと思っている）という有意な差が認められた^[注13]。

- (8) Q5. 靴が大きく濡れる。 (T5: 4.13, t(23) = -2.232, p<.05)
- Q10. 新聞紙を大きく破る。 (T3: 3.79, t(23) = -3.295, p<.05)
- Q17. 皿を大きく割る。 (T3: 3.88, t(23) = -2.839, p<.05)

この3文はT3およびT5である。

このように、調査の結果、理解度と難易度評価にはどちらも有意な差が認められた。また、この2つの変数のデータから、理解度と難易度評価は、一部の外れ値を除き、正の相関が認められた。表1のデータからQ3・Q16を外れ値とみなしてこれを除いた相関分析を行ったところ、正答率と難易度評価で高い正の相関 ($r=.84$) が認められた。

Q3（ケーキを大きく切る）とQ16（山が大きく崩れる）は正答率が低く（全体平均値68.3に対して12.5と25）、難易度評価が高い（同4.7に対してともに4.92）。これは学習者が自己評価を誤っていることを示しており注意が必要である。そして、そのタイプはやはりT3とT5なのである。以上、アンケート調査の結果は次のようにまとめられる。

- (9) a. 「大きくV」の修飾関係はタイプによって学習者の理解度に差がある。動詞との組み合わせでは「切る・変わる・破る・進歩する・崩れる・変更する」、修飾関係ではT3（分割変化の産物のサマ）・T5（変化の範囲）・T6（変化の差）の理解度が低い。
- b. 「大きくV」の修飾関係はタイプによって学習者が感じるわかりやすさに差がある。動詞との組み合わせでは「濡れる・破る・割る」、修飾関係ではT3（分割変化の産物のサマ）とT5（変化の範囲）をわかりにくいと感じている。
- c. 「大きくV」の修飾関係の理解度と難易度評価には正の相関があるが、学習者の理解度が低いがわかりやすいと感じているものも一部ある。具体的には「ケーキを大きく切る」と「山が大きく崩れる」である。

4 コーパス調査——被修飾成分（動詞）の出現傾向

次に、学習者の理解が十分でないタイプの修飾関係が現実的にどのような使用傾向にあるのか、コーパスの調査を行った。学習者の理解度が低いタイプだとしても、現実の日本語環境での接触機会が少なければ、指導に注力する必然性は下がる。逆に、多数出現するのであれば、部分的にでもその項目を指導する必要性は高まることになる。

本稿では『筑波ウェブコーパス』（略称：TWC）および『現代日本語書き言葉均衡コーパス』（略称：BCCWJ）を調査した。コーパス検索ツールには国立国語研究所とLago言語研究所が共同開発した「NINJAL-LWP for TWC」（Ver.1.10、略称：NLT）および「NINJAL-LWP for BCCWJ」（Ver.1.20、略称：NLB）を用いた。NLTと

NLBは「名詞や動詞などの内容語の共起関係や文法的振る舞いを網羅的に表示できるのが最大の特長」である(バルデン・赤瀬川2012)。NLTとNLBでは文法パターンとして〈大きく+動詞〉が検出できるので、本稿の調査には最適である。調査はNLTとNLBの見出し語「大(おお)きい」のうち〈大きく+動詞〉のパターンで検出された用例から連用修飾構文に該当するものを目視で選別した^[註14]。

表2がTWC、表3がBCCWJの調査の結果である。それぞれ用例数上位1位から20位の動詞リスト・用例数・〈大きく+動詞〉全用例中の出現率(TWC:198,872件、BCCWJ:14,411件)・修飾関係のタイプ^[註15]、そしてBCCWJでは100万語あたりの頻度(PMW)の最も高いサブコーパスを参考に挙げてある。

コーパス調査の結果、明らかになったことは次の点である。

- (10)a. TWCとBCCWJの両コーパスにおいて「変わる・分ける・異なる・変化する・影響する」が上位5位を占めており、両コーパス全用例中21.1%の出現率でこの5つの動詞が現れる。
- b. 「変わる・異なる・変化する」はT6(変化の差)、「分ける」はT3(分割変化の産物のサマ)、「影響する」はT5(変化の範囲)を表す。この3タイプは学習者の理解度と難易度評価において、理解度が低い・わかりにくいと感じているタイプに該当する(3節参照)。
- c. 頻度上位20位中17件(曖昧例含む)がT6(変化の差)を表す。T1(結果

表2 「大きく+動詞」動詞別頻度(TWC+NLT)

動詞	用例数	出現率	タイプ
変わる	12,488	6.34	6
分ける	11,773	5.98	3
異なる	8,197	4.16	6
変化する	5,309	2.7	6
影響する	5,182	2.63	5
違う	4,288	2.18	6
左右する	3,256	1.65	6
変える	2,734	1.39	6
貢献する	2,582	1.31	5
関わる	2,233	1.13	5
成長する	2,182	1.11	1 or 6
できる	1,960	1	※
上回る	1,792	0.91	6
開く	1,593	0.81	※
広がる	1,570	0.8	1
分かれる	1,476	0.75	6
取りあげる	1,413	0.72	※
見える	1,412	0.72	5
寄与する	1,198	0.61	5
動く	1,171	0.59	7

表3 「大きく+動詞」動詞別頻度(BCCWJ+NLB)

動詞	用例数	出現率	タイプ	サブコーパス
変わる	526	3.68	6	国会
分ける	480	3.36	3	教科書
変化する	395	2.77	6	白書
異なる	377	2.64	6	出版(書籍)
影響する	266	1.86	5	白書
開く	240	1.68	※	韻文
領く	205	1.44	7	ベストセラー
上回る	197	1.38	6	白書
貢献する	190	1.33	5	白書
左右する	180	1.26	6	白書
違う	166	1.16	6	教科書
見える	154	1.08	4	教科書
寄与する	139	0.97	5	白書
見開く	139	0.97	※	ベストセラー
変える	137	0.96	6	教科書
広げる	126	0.88	1	ベストセラー
開ける	107	0.75	※	ベストセラー
揺れる	97	0.68	7	ベストセラー
増加する	95	0.67	6	白書
関わる	93	0.65	5	教科書

の副詞)は上位11位、T7(様態の副詞)は上位7位まで現れず、件数もT1は両コーパス40件中3件(「成長する・広がる・広げる」)、T7は同3件(「動く・領く・揺れる」)に留まる。

5 考察と提案——学習者の理解向上とコーパスの活用

前節までの学習者の理解度調査およびコーパス調査をもとに、「大きくV」に関する学習者の理解・習得に資するための方策を検討したい。

- (11) 「大きくV」の導入・提示方法について
「大きくV」については変化の差を表すタイプ(T6)を選択的・集中的に指導することが有効である。提示する動詞は「変わる、異なる、変

化する」が効果的である。同様に、変化の範囲を表すタイプ (T5:「影響する」) も学習者の理解度が低いがコーパスでの用例数が多く、高い学習効果が期待できる。

本稿の調査で明らかになった「大きくV」の理解に関する学習者の課題は分割変化 (T3)・変化の範囲 (T5) そして変化の差 (T6) である。本稿では特に変化の差を表すタイプの提示と指導を提案したい。このタイプは学習者の理解が十分でなく、かつ、コーパスでの用例数が圧倒的に多い。したがって、高い学習効果が期待できる。変化の範囲を表すタイプも同様である。例文についても、コーパスの用例数に鑑みて選別することが効果的であると考えられる。なお、導入の機会としては程度表現の一種として、あるいは〈形容詞ク形+なる／する〉の補足としてT1・T7とともに提示する、などが考えられる。

一方、分割変化を表すタイプ (T3) については、当面の指導・提示を行う必要性は高くないと本稿は考える。2.3で紹介したように、このタイプは〈形容詞ク形+なる／する〉の次に導入される可能性がある。その際にT1とT3の区別を厳密に導入・指導することは現実的でない。確かに、Q3「ケーキを大きく切る」の正答率は際だって低いが、回答の最頻値は(ア)＝モノのサマであり、T1・T2・T3は結果相に実現したモノのサマを表すという点では共通している。日本語教育文法・指導現場へ提供すべき知見としては、この3タイプの差違はひとまず看過してよいと思われる。ただし、両コーパスでの頻度2位「大きく分ける」とレシピ文に現れる「大きく切る」については学習者の接触機会が多いことが予想されるため、別途、留意しておく必要がある。

(12) 副詞的成分の分類の導入について

日本語学の通説となっている〈結果の副詞／状態の副詞〉の分類は「大きくV」の修飾関係の学習に関しては導入の意義は低い。

「大きくV」の修飾関係を導入・指導する方法として〈結果の副詞／状態の副詞〉という分類は有用ではない。学習者の理解の補強という点で効果的なのは変化の差や範囲を表すタイプの提示である。結果の副詞 (T1) や状態の副詞

(T7) は(その過程や方略を探る必要はあるものの) 学習者は既に経験的に習得していると思われる。したがって、この分類の導入はラベルを貼る以上の意義を持たない。程度量や頻度の副詞を導入することも可能だが、そもそも副詞的成分の分類はその修飾関係の解釈から帰納的に導かれるものであり、副詞分類ありきではなく個々の動詞の意味タイプに応じて修飾関係が変わりうるという視座を提示できれば、それがもっとも望ましい。

最後に、〈形容詞ク形+動詞〉の学習指導にあたってはコーパスの利用を推奨したい。4節で実証したように、コーパスの検索ツールを利用することで、実効性の高いコロケーションや例文の利用が可能になると考えられる(中俣2014参照)^[注16]。そして、この作業は結果的には連用修飾構文の持つ特性——被修飾成分との意味的調整によって生じる修飾関係の多様性——を体験的に学ぶことにつながる。

6 今後の課題——まとめにかえて

本稿の分析は個別的な調査・分析の域を出ていないが、コーパス最頻出の用例が学習者の弱点項目であることを指摘するとともに、連用修飾研究と日本語教育文法の接続を試みた点で一定の意義を有するものと考えている。

最後に、今後の課題と論点を示してまとめとする。第一は調査方法の課題である。今後は探索型のアプローチを強め、コーパス調査をもとに調査項目を策定することで、調査精度および学習効果の向上が期待できるだろう。第二は学習者の習得方略に関する論点である。個々の学習者は連用修飾関係の解釈に対して経験的な習得方略を得ている可能性がある。形容詞の語義、副詞の知識、〈形容詞ク形+なる／する〉の援用など、その習得方略を調査・分析する必要がある。それによって、連用修飾構文に関して何を教えるべきか検討できるようになるだろう^[注17]。今後は本稿で得た知見と課題をもとに、その他の形容詞ク形(「長く、広く、深く」など)についても分析を進めていきたいと考えている。

〈福島大学〉

附記

本稿は日本語／日本語教育研究会第6回大会（学習院女子大学、2014年9月28日）におけるポスター発表「「大きく」を学習者はどのように理解しているのか」を加筆修正したものである。当日の参加者および本誌査読者から有益なご意見をいただいた。また、統計的検定については中村陽人氏にご教示いただいた。記して感謝申し上げる。言うまでもなく、本稿に残された誤謬の責はすべて筆者に帰する。なお、本稿は平成26年度日本学術振興会科学研究費補助金（基盤研究（C）「語彙意味論を活用した日本語情態修飾関係の研究」研究代表者：井本亮、課題番号：25370508）の助成を受けて行われた研究成果の一部である。

注

- [注1] …… もちろん副詞語彙の教育が不可欠であることは言うまでもない。問題は副詞の語彙リストに連用修飾の形容詞ク形が含まれないことや修飾の基礎知識の提示など語彙教育だけでは補えない項目や視点があるということである。
- [注2] …… 『初級を教える人のための日本語文法ハンドブック』（庵他2000）は副詞の分類に「誘導・程度・様態」という分類を採用している。連用修飾成分の形容詞ク形については「動詞を修飾するという点では副詞と同じ機能を持っています」（p.347）と補足されているものの、副詞の項では「副詞には入れないのが普通」（p.383）として除外されている。副詞的成分をめぐる品詞と構文成分の外延のずれがその遠因になっているとも思われる。
- [注3] …… 本稿の考察対象は加藤（2003）の定義する構造的修飾・意味的修飾・機能的修飾の三側面をすべて満たすものである。
- [注4] …… 形容詞「大きい」の語義については国立国語研究所（1972）、久島（2001）、井本（2006）、生天目・永井（2013）などを参照。ひとことで言えばその基本的語義は「空間に占める次元量が [大] であること」である。
- [注5] …… 「大きくV」の修飾関係の多様性に注目した論考に井本（2006）と張（2010）がある。張は形容詞ク形「大きく」が動作の結果の状態や動作の様態を表すだけでなく、「救済対象を大きく広げる」「両手を大きく広げる」などでは変化の過程のあり方を表すこと、意味的に程度副詞に近似していることなどを指摘している。井本は「大きくV」の修飾関係の多様性の源泉について、動詞が表す事象に含意される [空間量] のありかによって由来するという記述的一般化と各解釈を導く意味構造を提示している。
- [注6] …… 「大きくV」の修飾関係は他にもある。たとえば「ドアが大きく開く」である。「ドアが開く」は動き（扉が動く）と変化（開口空間の出現）の2つの事象を一体として表し（岩田2010）、「大きく」はそれぞれの事象を修飾限定する。また、「世界経済を大きく見ると（そこには2つの傾向がある）」などはマクロ的視点と言うべき修飾関係である（新野直哉氏のご教示による）。

こうした他の修飾関係の存在は本稿の議論に支障を来すものではない。

- [注7] …… 厳密には連続的なスケール性を伴う程度とは異なるのだが（井本2006参照）、ここではモノ・ウゴキのサマとの弁別に留め、これ以上踏み込まない。
- [注8] …… T4は矢澤（2000）の「状況相修飾関係（成分）」に相当する。
- [注9] …… 北原（1981）、矢澤（2003）などを参照。
- [注10] …… コーパスを用いて形容詞「大きい」と「高い」の叙述用法における意味・用法を分析した生天目・永井（2013）は「大きくV」を考察対象から除外する一方で「大きくなる」については「叙述用法を強く残していると捉え」ている。
- [注11] …… 特に（ウ）の選択肢が（ア）（イ）と等価な選択肢であることも強調した。
- [注12] …… すべての統計的検定にはIBM® SPSS statistics® ver.22を使用した。なお、Q19の正答率は偏差0のためt値は得られなかった。
- [注13] …… 全体平均値より低い（わかりやすい）という有意な差が認められたのは、Q15（T1）「木が大きく育つ」（ $t(23)=2.813, p<.05$ ）、およびQ19（T7）「手を大きく回す」（ $t(23)=3.58, p<.05$ ）であった。
- [注14] …… 「できる」（TWC: 1968, BCCWJ: 64）では「分類／変化／成長-できる」のような「V-できる」の形式も抽出されており、別の動詞との修飾関係を内包している可能性があるため、今回は調査対象から除外した。なお、BCCWJの「できる」64例のタイプ別内訳はT3: 14例、T5: 10例、T6: 7例、T1: 5例、T4: 2例、T2: 1例、T7: 1例（複数所属含む）であり、コーパス全体の傾向を反映していると思われる。
- [注15] …… 修飾関係の判断が困難なもの・今回の分析対象から除外したものに※印を付している（注6および注14も参照）。
- [注16] …… 中俣（2014）は初級の学習項目について、コーパスでのコロケーションやジャンル・文脈に関する情報をあわせて提示することで、導入や例文の実効性を高めようとする画期的な試みで、本稿が志向するところと軌を一にする。
- [注17] …… これは庵（2013）の言う「Whatの問題」である。

参考文献

- 庵功雄（2011）「日本語記述文法と日本語教育文法」森篤嗣・庵功雄（編）『日本語教育文法のための多様なアプローチ』pp.1-12. ひつじ書房
- 庵功雄（2013）『日本語教育・日本語学の「次の一手」』くろしお出版
- 庵功雄・高梨信乃・中西久実子・山田敏弘（2000）『初級を教える人のための日本語文法ハンドブック』スリーエーネットワーク
- 井本亮（2006）「状態変化の修飾—副詞的修飾関係の決定要因と事象構造」矢澤真人・橋本修（編）『現代日本語文法現象と理論のインタラクション』pp.241-324. ひつじ書房
- 井本亮（2009）「日本語結果構文における限定と強制」小野尚之（編）『結果構文のタイロロジー』pp.263-313. ひつじ書房
- 岩田彩志（2010）「Motionと状態変化」影山太郎（編）『レキシコンフォーラム』No.5,

pp.27-52. ひつじ書房

- 加藤重広 (2003) 『日本語修飾構造の語用論的研究』 ひつじ書房
北原保雄 (1981) 『日本語助動詞の研究』 大修館書店
久島茂 (2001) 『〈物〉と〈場所〉の対立—知覚語彙の意味体系』 くろしお出版
国立国語研究所 (1972) 『形容詞の意味・用法の記述的研究』 秀英出版
張志剛 (2010) 「変化の程度を表す「大きく」「激しく」について」 『日本語／日本語教育研究』 1, pp.177-185. 日本語／日本語教育研究会
中俣尚己 (2014) 『日本語教育のための文法コレクションハンドブック』 くろしお出版
生天目知美・永井凉子 (2013) 「数値が大きいことを表す「高い」「大きい」の類義用法—BCCWJを資料としたコーパス分析」 『言語学論叢』 オンライン版第6号, pp.49-68. 筑波大学一般言語学研究室
仁田義雄 (2002) 『副詞的表現の諸相』 くろしお出版
日本語記述文法研究会 (2009) 『現代日本語文法2』 くろしお出版
バルデシ=ブラシャント・赤瀬川史郎 (2012) 「NINJAL-LWP for BCCWJ実習マニュアル」 第13回日本語文法学会チュートリアル資料
矢澤真人 (2000) 「副詞的修飾の諸相」 仁田義雄・村木新次郎・柴谷方良・矢澤真人 『日本語の文法1 文の骨格』 pp.187-233. 岩波書店
矢澤真人 (2003) 「副詞の機能」 北原保雄 (編) 『朝倉日本語講座5 文法1』 pp.70-89. 朝倉書店
矢澤真人 (2006) 「情態修飾関係の素性分析について」 矢澤真人・橋本修 (編) 『現代日本語文法—現象と理論のインタラクション』 pp.325-343. ひつじ書房

参考資料

- 『新日本語の中級』 海外技術者研究協会 (編著)、スリーエーネットワーク
『できる日本語 (初中級) 本冊』 できる日本語教材開発プロジェクト、アルク
『みんなの日本語初級 I 第2版—本冊』 スリーエーネットワーク
『みんなの日本語初級 II 第2版—本冊』 スリーエーネットワーク

使用コーパス・検索ツール

- 国立国語研究所コーパス開発センター 『現代日本語書き言葉均衡コーパス』
http://www.ninjal.ac.jp/corpus_center/bccwj/ (2014年11月28日参照)
筑波大学留学生センター：日本語・日本事情遠隔教育拠点 『筑波ウェブコーパス』
<http://www.intersct.sukuba.ac.jp/~kyoten/twc.html> (2014年11月28日参照)
「NINJAL-LWP for BCCWJ」 <http://nlb.ninjal.ac.jp/> (2014年11月28日参照)
「NINJAL-LWP for TWC」 <http://corpus.tsukuba.ac.jp/> (2014年11月28日参照)